

科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 26 年 6 月 25 日現在

機関番号：37701

研究種目：挑戦的萌芽研究

研究期間：2011～2013

課題番号：23653164

研究課題名(和文) ミリタリーソーシャルワークにおける Deployment サポートプログラムの研究

研究課題名(英文) Study on Deployment Support Programs in Military Social Work

研究代表者

田中 顕悟 (TANAKA, KENGO)

鹿児島国際大学・福祉社会学部・講師

研究者番号：30340368

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 2,500,000 円、(間接経費) 750,000 円

研究成果の概要(和文)：本研究は、アメリカにおける Military Social Work の実践状況ならびに専門職 (Military Social Worker) の養成課程の把握をすすめ、我が国におけるその活用について検討を進めることにある。とりわけ、Deployment に関わる支援と、Military Culture に着目した。

その結果、この2点については、Military に関係する人々への支援過程においては必要不可欠な視点・知識であることが明らかになるとともに、それらは、我が国において関連する支援活動に従事する専門職においても、その支援活動の過程において活用が可能であることが明らかとなった。

研究成果の概要(英文)：The present study seeks to advance the understanding of current conditions in Military Social Work in the United States as well as training courses for professional Military Social Workers, and to advance the study of their application in our own country. In particular, we focused on support related to Deployment and on Military Culture.

Accordingly, in relation to these two points, it became clear that they are indispensable viewpoints and knowledge in the course of support for people connected with the military, and also, with regard to professionals engaged in support activities connected with our country, it became evident that it is possible to apply them during the course of those support activities.

研究分野：社会科学

科研費の分科・細目：社会学 社会福祉学

キーワード：Military Social Worker Deployment Deployment Cycle

1. 研究開始当初の背景

本研究は、アメリカではソーシャルワーク実践の一領域として確立され(なお、類似するソーシャルワーク実践領域については、カナダ・オーストラリア等でも確認される)、かつ主として大学院において専門職(Military Social Worker)の養成が展開されている Military Social Work を研究対象として措定した。

本研究の開始当初、我が国においては、この Military Social Work に関しては、十分な研究経過ならびに実践展開は見られていなかった。これは、我が国ではいわゆる「Military」という組織そのものが存在していないとされていることや、さらには、ある特定の職業(集団)に従事する人々とその関係者へのソーシャルワークの視点に基づく支援については、十分な議論が展開されていなかった等の要因が重なり、「Military」という環境・集団およびそれに関係する人々への支援に特化したソーシャルワーク理論ならびに実践活動を研究対象として認知される機会が多くなかったのではないかと考えられる。

一方、上記の内容に関連し我が国の状況について目を向けた場合、Militaryの機能の一つである「国防」に関連する集団としての「自衛隊」においては、主として、1992年の「国際連合平和維持活動等に対する協力に関する法律」施行以降、様々な国際貢献・海外活動に従事しており(実際には、1991年に掃海部隊がペルシャ湾に派遣されている)、さらに2011年3月の東日本大震災に代表されるような国内における様々な災害派遣活動を展開しており、隊員自身は非常にハイリスクな活動への従事が顕著となっており、同時に隊員の家族についても、隊員の活動内容の多様化に伴い、別離等による生活上の変化への対応が必要とされる場面もあり、そこには様々な生活

問題の発生も懸念される。

その一つとして、自衛隊員の自殺の問題に関しては、2000年に当時の防衛庁が自殺者の増加への対応として、「自衛隊員のメンタルヘルスに関する検討会」を立ち上げ、その検討結果に沿って現在に至るまで対応が進められており、さらには、2004年からは従来の部隊相談員・部隊カウンセラーによる活動に加えて、陸上・海上・航空自衛隊のそれぞれに臨床心理士が採用・配属され、隊員に対する心理専門職によるメンタルヘルスに関わる活動については、組織全体として整備され質の高い対応が進められていた。

その一方で自衛隊の活動については、国内外の様々な情勢の影響により、今後ますます活動範囲の拡大と同時に業務内容の多様化ならびに高いリスクを包含する活動の増加が考えられ、それに伴い隊員がより複雑化・重複化した生活問題に直面する可能性が予測されるだけでなく、その影響は隊員の家族にも波及すると考えられた。

そこで本研究においては、これらの背景を受け、隊員とその家族へのより効果的な支援活動の展開ならびにシステムの整備においては、アメリカにおける Military Social Work の状況と、その活動に従事する専門職(Military Social Worker)の養成課程に着目することにより、今後の我が国の自衛隊の状況に応じた隊員および家族へのサポートプログラムの構築と、それに携わる専門職の養成が必要と考え研究テーマを設定した。

2. 研究の目的

本研究は、我が国では未開拓のソーシャルワーク実践領域の一つである Military Social Work の中でも特に、「Deployment」の対象となった兵士とその家族に対する支援活動の内容と、それに携わるアメリカの

Military Social Worker の養成課程の把握と分析を行うとともに、我が国の実情に応じたサポートプログラムの検討を行うことを目的としている。

具体的には、本研究は、アメリカにおける Military Social Work の実践現状を基盤とし、Deployment に関わる自衛隊員とその家族に対するソーシャルワークの専門的な介入の視点やそこでの専門的知識・技術、そして実際の専門職による実践活動の必要性を掲げるだけでなく、ソーシャルワーク実践の基本的視点の一つである「生活の全体性」を起点とし、陸上自衛隊員とその家族の生活全般を対象とした、Deployment の全期間に関わるソーシャルワーク実践の展開について検討を進めその必要性を提示し、より効果的かつ効率的なソーシャルワーク展開のためのサポートプログラムの構築について提言を行い、それに携わる専門職の養成についても問うものとした。

3. 研究の方法

本研究の助成対象期間前に進めてきたアメリカにおける Military Social Work の概要に関する文献・資料研究を基盤に、University of Southern California (南カリフォルニア大学) School of Social Work (以下、USC) の Military Social Worker 養成課程 (Military Social Work and Veteran's Service) に関する文献・資料研究を進めるとともに、実際に USC における講義等に参加しその体系と講義内容等を明らかにするとともに、講義担当教員より Military Social Work ならびに Military Social Worker 養成に関する資料・情報収集を行った。

また、USC の関連機関の一つである Center for Innovation and Research on Veterans & Military Families (以下、CIR) における各種研修等に参加するとともに、

関係者よりソーシャルワーカーへの現任訓練の内容ならびに Military Social Worker の養成における USC との連携等について資料・情報収集をすすめるとともに、それら把握された事項の整理と併行して、自衛隊における隊員・家族支援活動に関わる情報・資料収集を進めた。

以上のような、資料・情報収集を通して、(1) USC ならびに CIR における Military Social Worker の養成課程の概要と関連活動、について考察・分析を進め、さらに自衛隊における隊員とその家族へのサポートの現状等について整理をすすめることで、我が国の状況に応じた、(2)Deployment に関わる隊員と家族への支援プログラムと、その支援活動に従事する関係者の Military Social Work の視点・知識・技術の活用、について明らかにすることとした。

4. 研究成果

本項では前述の(1)・(2)に即してその成果を以下の2点について概要を報告する。

(1)USC ならびに CIR における Military Social Worker の養成課程の概要と関連活動

USC School of Social Work の Master of Social Work は、Concentrations(5コース)と、Sub concentrations(5コース)により構成されており、Military Social Worker の養成に関わる「Military Social Work and Veteran's Service」は Sub concentrations の一つである。そこでは、USC と CSWE が協力して開発を行った『Advanced Social Work Practice in Military Social Work』に準拠し、以下のようなカリキュラム体系が構築されていることが明らかとなった。

The Military as a Workplace Culture
Managing Trauma and Post Traumatic
Stress in Military Social Work and
Veterans Services

Clinical Practice with the Military
Family
Field Practicum

Elective options があげられる。))

特に、～ の講義科目においては、ソーシャルワークに関する基礎的な理論だけでなく、Military Social Work の実践過程において必要とされる様々な基礎的な知識

識・技術の習得が可能となっている。例えば、Military の業務に関連し Service Member (以下、SM) および退役者そして彼らの家族が直面する可能性の高い疾病・精神疾患ならびに身体障害、そして自殺・薬物乱用・DV・複合的な家族問題等への対応について基礎的な理論と事例に基づく講義及び相談面接の演習等が行われていた。

また、講義担当者には、実際に Military Social Worker としての臨床経験が豊富な教員も多く担当しており、さらに受講学生の中には、アメリカ軍の現役の SM および退役者も複数在籍していたため、より Military Social Work の臨床に即した講義がすすめられており、全体として Evidence-Based Treatment Methods に基づく実践展開を目指した専門職の養成がすすめられていることが明らかとなった。

なお、特筆すべきは、多くの科目において(次項(2)に関連する)、Military に特有の Deployment (Deployment Support) ならびに、Military という組織・(職場)環境においてソーシャルワーカーが支援活動を展開するために理解が必要とされる Military Culture への理解につながる講義内容が含まれていたことがあげられる。

また、CIR では、0ヶ所を起点に様々な活動を展開しており、その対象は SM・退役者とその家族そしてホムス(退役者)と幅広く、さらに様々な調査・研究活動も展開していた。

その中の一つとして、2011年8月には、海外での活動を終えた National Guard の SM とその家族を対象としたサポート・プロジェクトが開催され、そこでは SM と家族がともにリラックスして過ごす時間を提供するだけでなく、SM と家族を対象とした「REINTEGRATION SKILLS TRAINING」や、特に家族を対象とした「Military Culture」に関する講習が行われていた。

以上のようなことから、SM・退役者とその家族を対象とする Military Social Work の展開においては、多岐にわたる他のソーシャルワーク実践領域において活動をすすめているソーシャルワーカーと同様に Specialist としての養成が重要であり、その養成においては特に Military に特有の知識・視点が必要と考えられ、その中でも特に考慮すべきは Deployment ならびに Military Culture と考えられる。(この点については、次項(2)を参照。)

(2)Deployment に関わる隊員と家族への支援プログラムと、その支援活動に従事する関係者の Military Social Work の視点・知識・技術の活用について

上記(1)の内容を参考としながら、本項目における研究成果としては以下の2点に整

理される。

Deployment に関わる隊員と家族へのサポートプログラムについて

Deployment とは、『U.S. Army Deployment Cycle Readiness: Soldier's and Family Member's Handbook』によると「軍隊において、訓練や実際の任務(mission)のために、個人または部隊ごとに本拠地から他の地域(国内外)に移動することであり、その任務は戦闘活動または事故・災害への対応が考えられ、それらは通常、永続的なものではない」とされる。また、Deployment には、ある一定の Cycle いわゆる Deployment Cycle があるとされており、その主要な Stage Model としては、様々な調査・研究によりこれまで、3Stage・4Stage・5Stage・7Stage の各 Stage Model が示されている。

このようなサイクルを経るとされる

Deploymentは、単にMilitaryにおいて活動を行うSMのみが、活動内容および活動場所の変更に対応することで完結するものではなく、その家族にも多大な影響を与えることが考えられる。

例えば、『Report on the Impact of Deployment of Members of the Armed Forces on Their Dependent Children』では、deploymentの子どもを含めた家族に与える影響について、

- ・(SM である)両親または一人親の Deployment による、子どもとの分離による影響
- ・(SM である)両親または一人親の複数回にわたる deployment が子どもに与える影響
- ・負傷した(SM である)両親また一人親が Deployment より帰還することによる子どもへの影響
- ・(SM である)両親または一人親の Deployment による死が、子どもに与える影響
- ・(SM である)両親または一人親の Deployment が、不安またはうつ状態にある子どもに与える影響
- ・(SM である)両親または一人親の Deployment が、児童虐待、ネグレクト、DV、子どもによる薬物の乱用等の危険因子にあたえる影響

の6つの項目にわたり報告されている。

そのため、Deployment にかかわる SM およびその家族については、直面するであろう Deployment の全ての時期において、彼ら自身の環境、つまり Deployment が彼らに与える作用ならびに直面する可能性の高い課題とそれらへの対応、さらには活用可能な社会資源についても把握しておく必要があると考えられ、支援者は彼らの情報収集お

よび彼ら自身が置かれている環境・状況に対する理解が円滑に進むようなサポートをすすめるとともに、予防的視点からの支援活動をすすめるとともに、SMとその家族に何らかの生活課題が把握された際の直接的または間接的支援を進める必要がある。(その際には、SMが所属する部隊の上等等との連携は不可欠と言える。)

なお、必要とされる情報等の一例としては、下記のように整理される。

- ・ Deployment Cycle の各段階の特徴とそこで必要とされる対応ならびにそれに関連する知識 (例: Deployment Cycle の各特徴と、そこにおける家族・配偶者・子ども・両親のそれぞれに求められるまたは適切と考えられる対応について・各 Cycle に関する情報収集等に活用可能な Web サイトおよび出版物の紹介 Deployment 期間中の司令部や SM とのコミュニケーションについて)
- ・ 保健・医療・福祉・経済面に関する生活上の諸問題への対応とそれに関連する利用可能な資源について
- ・ ストレス (Combat and Operational Stress)、自殺 (予防)、鬱、PTSD 等に関する知識とその対応ならびに活用可能な資源等について

これは、我が国の自衛隊でも同様と考えられる。つまり、なんらかの Deployment (国内外への派遣活動) が生じた時点ならびにその渦中だけでなく、平時においても常に SM とその家族への支援体制を整備していくことが必要といえ、この点において前掲の『Report on the Impact of Deployment of Members of the Armed Forces on Their Dependent Children』では、「Deployment が SM およびその家族の現実として起こりうる可能性があることを示し、その上で、deployment への対応が決して容易ではないことを前提としながらも、適切な準備を行うことにより、SM とその家族のストレスや不安を最小限にとどめ、SM が不在の際に家族が安心して生活が可能である」ことを示している。

また、SM とその家族への支援活動に従事する支援者については、上記 3 点に関する知識・情報の把握も必須とされ、特に Deployment Cycle に関しては、ソーシャルワーカーだけでなく、保健・医療・心理専門職等においても、

- ・ 各ステージ間の関係性と全体のサイクルにおける各ステージの持つ特徴
- ・ 各ステージと Military Culture との関係
- ・ 各ステージにおいて考慮すべき SM とその家族の身体的・心理的・社会側面に關わるリスクならびに生じる可能性のある生活課題とその影響

に関する理解をすすめ、それぞれの専門領域における支援技術・知識とあわせて支援過程において活用することで、より効果的かつ効率的な支援を展開することが可能であると考えられる。

以上のことから、既に臨床心理士及び部内相談員・カウンセラー等が支援活動を展開している自衛隊においても、上記の内容を参考にしつつ自衛隊の状況に応じたサポートプログラム構築の検討ならびにその必要性があることが明らかとなった。

Military Social Work の視点・知識・技術の我が国における活用について

ここでは、Military Social Work の視点・知識・技術の中でも、特に「Military Culture」に焦点をあて整理をすすめる。

Military Culture とは、「(軍の)メンバーが、どのようにコミュニケーションを行い、相互作用し、彼ら自身の経験を理解しているかということ」を構築している伝統・価値観・信念・世界観の基本的枠組み」(Coll, Weiss, & Yarvis; 2011; Weiss & Coll; 2011) とされるが、Military Social Work の展開という視点から考えると、SM の生活時間の多くを過ごしているまたは過ごしてきた「場」における Culture としてのみとらえるだけではなく、その家族成員もその影響を多く受けていることを忘れてはならない。

例えば、NASW 発行の『What Social Workers Do』(和訳『ソーシャルワーカーの役割と機能 - アメリカのソーシャルワーカーの現状 - 』)では、「フィットワース(Whitworth, S 1984)は、軍隊の家族は少なくとも次の 8 つの意味で特別であると記している。(1)機能性、(2)別居、(3)両親の定期的不在、(4)子どもたちの適応性、(5)海外生活、(6)ストレスとリスクの高い仕事、(7)家族のニードと軍隊機構の要求との間の葛藤、(8)権威的マネジメント環境」(Garbaer & Mcnelis; 1955)と表している。

この(1)~(8)は、Military Social Work における SM およびその家族が直面する課題と密接な関係を有しているといえ、これらは単に Military に固有の業務・任務(ハイリスク・高い守秘性等)関連するだけでなく、その背景には軍隊に特有の Culture が影響していると考えられる。そのため、Military Social Work に関わる保健・医療・心理・福祉専門職においては、Military Culture の理解が必要不可欠であると考えられる。

この Military Culture の具体例としては以下のように整理される。

各組織の特徴ならびに慣習等(自衛隊

であれば、陸上・海上・航空自衛隊の各組織に関する組織体系、各組織の制服や階級、各組織のモットーなど。また、各組織において日常的に頻繁に使用される特徴的な用語等も含む)

隊員と家族が利用可能な各種の社会資源(地域において使用可能な社会資源だけでなく、特に自衛隊内において使用可能な様々な社会資源や、外部委託されているサービス等も含む)

業務に関連し、直面する可能性のある様々な生活課題等について(TBI・睡眠障害・自殺・悲観(配偶者の死別等)・アルコール及び薬物の乱用・PTSD等)

退役後について

つまり、自衛隊においても、その組織体系ならびに業務特性等から、固有の Culture が根付いていると考えられ、その Culture の中で様々な活動を行い、その影響を受けながら日常生活を営む隊員およびその家族そしてその影響を受けてきた退役者への支援過程において、専門職には Military Culture への理解が不可欠であり、それらは専門職の養成または現任訓練の過程においても、Military Culture への理解に関する講義またはトレーニングを導入の必要性は明らかである。

また、先に挙げた CIR では地域のソーシャルワーカーに対して Military Culture の研修会を開催し、民間のソーシャルワーカーの Military Culture に関する理解の促進を深めていたことから、例えば将来的に自衛隊においても、保健・医療・心理専門職が、隊員への支援過程においてその上司等に対し、Military Culture の視点を考慮した、それぞれの専門職の立場からのとしてのコンサルテーション(これは間接的に、隊員とその家族への支援に関わると考えられる)等も可能ではないかと考えられる。

また、自衛隊内の保健・医療・心理専門職が、今後、隊員とその家族が利用する地域の様々な社会資源との連携を図る機会が生じた場合(アメリカの Military Social Worker は必要に応じ、地域のソーシャルワーク機関と連携をすすめている)、この Military Culture の知識の活用をはかり、他機関・他専門職との連携・協働さらにはネットワークの構築をすすめることで、隊員・家族にとって効果的な支援を進めることが可能とも考えられる。

結論として、上記で整理をすすめたアメリカにおける Military Social Work の展開ならびに専門職養成の状況から、我が国において同様のシステムを導入することは、自衛隊の組織および業務体系ならびに取り巻く環境等から困難な面も確認されるが、

現在の自衛隊における心理専門職ならびに部内相談員・カウンセラーの方々の活動において、少なくとも上記で整理をすすめたような Military Social Work の視点・知識・技術は活用可能であり、また今後さらに必要とされる可能性があることが明らかとなった。

今後も、アメリカの Military Social Work の実践状況とその変遷について理解を深めることにより、自衛隊における隊員・家族支援活動への応用と今後、自衛隊員とその家族を取り巻く環境が変化した場合に必要と考えられる支援のあり方・展望についても、さらなる研究を進める必要があると考える。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文](計3件)

田中 顕悟 鹿児島国際大学福祉社会学部論集 査読無(32-4 2013年 pp87-96) Military Social Work における Deployment Cycle Support に関する一考察(その2)

田中 顕悟 鹿児島国際大学福祉社会学部論集 査読無(32-3 2013年 pp105-114) Military Social Work における Deployment Cycle Support に関する一考察(その1)

田中 顕悟 鹿児島国際大学福祉社会学部論集 査読無(32-2 2013年 pp43-52) Military Social Worker の養成課程と Military Culture に関する一考察

[学会発表](計2件)

田中 顕悟 Military Social Work における Military Culture への理解の必要性に関する一考察(2013年12月1日 第26回日本保健福祉学会 北九州ウエルとばた)

田中 顕悟 アメリカにおける Military Social Work の養成課程に関する研究(2012年10月27日 第25回日本保健福祉学会 県立広島大学)

6. 研究組織

(1)研究代表者

田中 顕悟(TANAKA Kengo)

鹿児島国際大学・福祉社会学部・講師
研究者番号: 30340368